図像史料と歴史学
The Iconographical Primary Sources in History

邦語研究の研究動向と史料批判の「共有地」と「共有知」
The Research Trends of Iconographical Studies in Japan and Historical Sources Criticism as the 'Common Works' and 'Common Knowledge'

金澤宏明
KANAZAWA Hiroaki

0. はじめに

アメリカ史及び西洋史研究における「史料」としての視聴覚史料論が議論されて久しい。先駆けとして、1972 年の美術批評家ジョン・バージャーの『イメージ――視覚とメディア』、77 年のスーザン・ソンタグの『写真論』、80 年のロラン・バルトの『明るい部屋』など、1970 年代以降の図像や写真を巡る論争は、単なる作品論を越えて、作者、掲載メディア、読者、読み解きなど多角的な接近法を可視化してきた。この論点は批評と反論、止揚と拒絶など多くの反響を引き起こしたが、当時は歴史家の人口に膾炙することはなかった[1]。時に歴史家は図像史料をそのわかりやすさや端的さゆえに、自身の解釈や分析を下支えする論拠として提示する。しかし、それは果たしてテクストや統計資料と同様な史料批判を経たものであったか。また、同時に図像史料は「わかりやすい」ものと捉えるのは自明なことであったのだろうか。時には歴史家が慎重に検討を重ね、憂慮してきた「神話」の一端ではなかろうかとの疑念も起こった。

しかしながら、西洋文化史家ピーター・バークの疑念や刺激的な問いかけ

Rikkyo American Studies 37 (March 2015)
Copyright © 2015 The Institute for American Studies, Rikkyo University

をまたずとも、写真や政治マンガは万能な語り部などではなく、よりアクチュアルな記録物として位置づける研究が現れ始め、歴史家の間で徐々に認知を得てきた。しかし、各研究のメソドロジーの機能性や手法的な普遍性についての議論はいまだ黎明期にあり、歴史研究としての視聴覚史料の図像論が各研究者をつなぐ「共有知」かつ「共有地」となる議論を構築することができたのか、いまだ疑問は残る[2]。こうした議論の次の一手の土台とするため、本稿は視聴覚史料のうち図像史料を巡る本邦での学説史を俯瞰し、特に筆者の問題関心である歴史史料としての政治マンガ分析での研究視点を整理する[3]。その上で歴史史料としての視聴覚史料の扱い方を論じるものである。

1. 日本国内の歴史学での図像研究の進展

政治マンガ（本稿では風刺マンガ、風刺画、一コママンガを含む）に限定せず、本邦での図像としてのマンガを対象とした学術研究を俯瞰すると、その学術的深化は、1980 年代が分水嶺である。科研費挑戦的萌芽研究「マンガに関する人文・社会科学研究の国際的・学際的データベースの構築」（代表：家島明彦）では、国内の全国規模の査読誌の一部を対象にマンガに関する学術論文の掲載動向分析を行った。心理学、教育学、情報学、社会学、ジェンダー研究、歴史学、文学分野で接近しやすい査読誌を中心にマンガ研究（ストーリー・マンガ、風刺マンガ、四コママンガ、新聞マンガなど）の掲載状況を目視で悉皆調査を進め、研究動向を確認した。こうした研究調査の作業過程報告で、心理学、社会学、教育学、ジェンダー研究でも 1980 年代に徐々に増え、特に 1990 年代後半以降に掲載が顕著となり、2000 年代後半に掲載数は落ち着いたことを明らかにした。しかし、学術雑誌毎に掲載傾向があり、掲載論考は全体的には多いとは言えない。また、図像を多数掲載する論文は非常に限られていることも判明した[4]。

西洋史研究の脈絡において、国内研究の進展をうながしたのは間違いなく 1993 年に刊行された森田安一の『ルターの首引き猫――木版画で読む宗教改革』によるところが大きい。日本史や日本文学の領域では絵巻物や物語絵、仏教画、絵地図を一次史料（資料）とする研究があるが、西洋史やアメ

リカ研究の脈絡でも国内査読誌で図像資料を中核とした論考が掲載されることは希であった。筆者は20世紀転換期のアメリカ海外領土膨張問題を扱う対外関係史（外交史）研究者である。大学院修士一年目の特殊講義で森田安一に師事したことが政治マンガ研究のきっかけの一つとなった。これまでにハワイ併合問題や中米地峡運河計画、キューバ独立問題、フィリピン領有問題などの帝国主義研究を進展させてきたが、同時にこうした外交政策を扱う当時の一般的アメリカ人（ここでは「アメリカ流の生活様式」を享受していたWASPを指す）の外交意識を析出するためにそれぞれの外交課題を扱った政治マンガを分析している[5]。

前述の調査に筆者は歴史学およびアメリカ地域研究のたちばから査読誌悉皆調査に参画し、『西洋史学』『アメリカ研究』『アメリカ史研究』『アメリカ経済史研究』『英文学研究』『アメリカ文学研究』を出版初号から2013年までの全号を、『史學雑誌』と『歴史学研究』は1991年から2013年にかけての出版号を調査した。図像史料分析を行っている学術論文をA群、図像の提示があるないしは図像にわずか一言でも言及がある論文をB群として、A群6報、B群16報であった（『アメリカ経済史研究』『アメリカ文学研究』に関しては掲載なし。『史學雑誌』に関しては集計精査中）。歴史学以外では、日本文学の脈絡で科研費研究をきっかけとして専門研究誌『絵解き研究』（石田書院）が刊行され（1983-2011年：全22冊）、浮世絵研究でも太田記念美術館が紀要として『浮世絵研究』（財団法人浮世絵太田記念美術館：前継『太田記念美術館 論集』）を刊行している。しかし、国内では西洋史、アメリカ研究の分野におけるこうした雑誌はなく、既存の査読誌において十全な図像を提示しうる掲載環境の「場」は整っていない。

同科研費調査の参加研究者が作業経過に行った意見交換では、多くの図像・マンガの先行研究が図像を掲載するにあたって、図像掲載の手間や、掲載による紙面の文字数を削減せざるを得ないことなどから、論考の発表場所として紀要が選ばれた経緯があるのではないかとの仮説が出た。CiNiiなどによる集約的な横断検索で可視化されるまで、『マンガ研究』（日本マンガ学会）、『美術研究』（東京文化財研究所）のような専門誌以外では同分野研究者からでも図像・マンガ研究が参照しづらい状況にあり、論文投稿に際して

その困難を感じた[6]。日本史や日本文学の脈絡でも、査読誌の広告に絵巻物をはじめとする図像史料を活用した研究をしばしば目にするのに対して、実際に図像を列挙した論考が掲載されるのはまれであった。すなわち、学術論文の査読誌ではなく、紙面を比較的自由に構成できる研究書ないし紀要が図像研究の発表場所として自然と設定されてしまう現実があった。DTP 技術の進展によって論文執筆者も印刷会社も飛躍的に作業コストが低下した現在、紙面的制約をもって学術論文における図像史料の提示が困難な状況が続くのか動向を見守りたいが、こうした状況を変えるには図像の史料としての有効性の認知が広がり、既存の史料と同等の質を担保できるとの分野的承認が必要である。図像研究を試みるものが、こうした問いかけを各学会の編集委員や企画委員に地道に問いかけていくことが機会をひらく切っ掛けになろう。

しかしながら、こうした環境も 2000 年代にはいって積極的なアプローチが種々試みられるようになり、なおかつそれらが図像の取り組みいかんにかかわらず多くの研究者の視野にはいることとなった。国内での専門研究としては、2001 年に日本マンガ学会が設立されたが、マンガ研究の裾野は広く、集約的な研究団体としての道を探るのか、マンガ学として何らかのディシプリンを構築するのか模索が続いている。国内での政治マンガ研究を扱う研究会としては、日本マンガ学会カトゥーン部会例会（現代表：茨木正治）や、静止画研究会（現代表：小山昌宏）が活動を続けている。定期刊行の一般専門誌としては小規模ながら『EYEMASK』（蒼天社）があり、現代国内風刺の実作ばかりでなく、少ないながらもマンガを巡る解説・批評文が掲載されている。

歴史学においても、歴史学会第 38 回大会で図像史料を巡るシンポジウム「歴史学における図像史料の可能性―版画・広告・ポスター―」が開催され、その成果として同学会誌『史潮』新 75 号にて同タイトルの特集記事が組まれた。同号は歴史研究の雑誌としては異例と言えるほど多数の図像や写真を掲載しているが、提示の仕方やサイズは柔軟で論文毎に異なっている。これは今後の学術雑誌での図像掲載の参考例になるだろう。また、中世学会（2009 年～）や第 64 回日本西洋史学会大会（2014 年）でポスター発表が導入された意義は、図像研究者にとって大きい。複数の図像史料を同時に多数

図示して、かつ並列的に議論することは、スライドを用いたとしても従来の全国学会大会規模の研究発表では難しい。また、西洋史学会大会では優秀賞を獲得した鈴木俊弘「記念のためにトリミングされる歴史――米国の祝祭活動に潜行する入植表象と人種論の言説的交差について」など、ポスター発表の特徴を活かした図像史料研究が散見された。また、立教大学アメリカ研究所の『立教アメリカン・スタディーズ』では写真や図像史料を扱う論考がしばしば掲載されている。たとえばマーク・トウェイン研究者として知られ、日本マンガ学会でも海外マンガ交流部会で活躍する中垣恒太郎の論考［中垣2006］は写真1を含む8図像を掲載する。

話の展開が多方面に散ってしまうが、しかし図像研究の孕む問題には続く節で論じる「研究の場」の問題だけではなく、こうした「公表の場」の問題が常につきまとう。応用の利く小規模な研究会や紀要、研究の性質的に適合しやすいポスター発表などの場を精力的に活用した先行研究者の工夫と創意の発展をさらに期するのは言うまでもなく、大規模な学会大会や全国規模の査読誌での発表の場を確保する努力は、そうした場を用意する側と参画する側、双方の工夫が必要であろう。専門誌の存在はこうした発表の機会を助けるものであるが、他方でそうした専門誌の目的を外れた研究は同様な図像を提示しうる論考の掲載場所を十全に確保できないでいる。研究者の活用できるメディア機器の利便性が向上している今、全国学会での図像研究をはじめとする視聴覚史料の発表の場がシンポジウムなどに限られるのではなく、自由論題や個別発表でも図像提示を十二分に可能とする報告の場が求められよう。こうした共有地の構築を図像研究者は意識せねばならない。

2. テクストとしての図像史料の可能性

政治マンガや図像史料をある種のテクストや統計と捉えるのであれば、その史料批判の方法はなんであろうか。史料操作の手法については次節で述べるが、ここでは歴史と政治マンガ（及び図像史料）の補完関係を一度明確に整理したい。

マンガ研究の脈絡ではしばしばマンガ作品内に画かれる歴史事項、あるい

は歴史を題材とする学習マンガのありようが議論され、時には時代考証や歴史的事実への取材が分析対象とされる。しかし、こうした「歴史マンガ」と「マンガを歴史史料」とすることの間にある距離感を明確に意識せねばならない。これらは相反するものでもないし、完全に重なり合うものでもない。ここではマンガ研究や図像研究の先行研究を取り扱いながら、(1) 歴史を題材とした図像作品、(2) 宣伝／教育における図像利用、(3) 図像の史料利用の三つの視点を確認したい。

論を待たずとも、(1) 歴史を題材とした図像作品――特にマンガ作品は無数にあり、それらの分析もまた多い。近年のストーリー・マンガをざっと挙げたとしても、歴史的事実に大きく取材した紀元前 4 世紀の古代オリエント世界を描く岩明均『ヒストリエ』(講談社、2003 年～)、16 世紀初頭フィレンツェの画家工房を扱った大久保圭『アルテ』(徳間書店、2013 年～)、フランス革命期の死刑執行人サンソンに取材した坂本眞一『イノサン』(集英社、2013 年～) や、他方で歴史を題材としながらも大胆に世界観を再編成したファンタジー的作品として中島三千恒『軍靴のバルツァー』(新潮社、2011 年～) のように枚挙に暇がない。こうした作品群の中には歴史的体験に取材した作品もある。作者の戦争体験を描写した中沢啓治『はだしのゲン』(集英社など、1973-85 年) や、マンガ家が父の記憶に取材した日本人軍人のロシア拘留の体験記を描くおざわゆき『凍りの掌』(小池書院、2012 年) が知られる。同様な国外の作品としてたとえばフランシスコ・サンチェス文、ナターシャ・ブストス画『チェルノブイリ 家族の帰る場所』(原著 2011 年) もあげられよう。

ストーリー・マンガ作品研究は、コンテンツ分析に加えて作品の発表された環境や出版情況を分析するメディア環境分析、さらには読者の受容を析出するオーディエンス研究などがあるが、登場人物の精神分析を試みる心理学の研究や、マンガを読む人の目の動きを分析する人間工学の論考まで、まさに研究分野の数だけ研究が存在しているといっても過言ではない[7]。ここに挙げた歴史を題材とするマンガについては、たとえば『はだしのゲン』には、児童文学や教育学をはじめ、近年では小学校での学級配架 (及び開架での閲覧) 問題から図書館学での論考もあるが、史学的視点からは日本思想史家吉

村和真らによる、物語（言説）、コマ内の表現（風景表現）、構成などからの多角的な分析がある［吉村、表、田中 2007；福間、吉村、山口 2012］。

ついで、(2) 宣伝・教育などにおける図像としては、児童に歴史に親しんでもらう目的でしばしば活用される日本史や世界史、世界の偉人などを題材としたいわゆる「学習マンガ」や、教科理解や難解な法律などの理解補助を促す教科書／副読本でのマンガ利用があげられる。こうした脈絡では、歴史的事実そのものを画くというよりは、その事実をわかりやすくオーディエンスに提示する機能に特徴がある。これらの図像には政治宣伝や国民動員を狙うプロパガンダ作品に加え、地政学的な意図を含んだ地図、商品の購買や政治宣伝を促す広告マンガやポスター作品も含まれる。

ドイツ史家でメディア史研究の佐藤卓己は『大衆宣伝の神話』（1992 年）で豊富なポスターや図像を提示しながら政治状況とメディア環境を接続し、送り手、受け手、仲介者を問わず宣伝の機能を分析する。近代日本メディア史研究者の土屋礼子は『対日宣伝ビラが語る太平洋戦争』（2011 年）で第二次世界大戦に際してアメリカが日本兵に対して撒いたり頒布したりした宣伝ビラや宣伝新聞の図像機能を論証する。さらには、人種主義的なイメージないしまなざす側の持つある種の規範が、雑誌に掲載された日本人表象に影響した点を指摘する教育社会学者の木暮修三による『アメリカ雑誌に映る＜日本人＞』（2008 年）もまた同様な論点を示す。

図像分析としての地図・絵地図に目を向けると、黒田日出男、杉本史子、メアリ・エリザベス・ベリ編著の『地図と絵図の政治文化史』（2001 年）は、地図や絵図の分析には、地図技術の発展史ばかりでなく、それらの政治的・哲学的コンテクストを把握すべきであることを提示する。図 1 は 1973 年に発行されたハワイ王国史を端的に紹介する図説図書に掲載された画像であるが、これは 20 世紀転換期にかけてハワイ併合論者ないし中米地峡運河（現パナマ運河）建設推進者がロビーに用いた地政学的含意を有する地図と同様の視点を持つ。キャプションには「Hawaii-Crossroads of the Pacific」とあり、太平洋上の拠点としてのハワイの重要性を示すが、地球儀を模した球体の枠組みにメルカトル図法の地図を無理にはめ込んだゆがみのあるものである[8]。実際の地球儀上のハワイを見れば分かるとおり、この地図のインパク

図 1「Hawaii-Crossroads of the Pacific」

トが持つほどの太平洋上で中核的位置にあるとは言えない。

これらに加えて、近年研究の進む展示や博物館、美術館のキュレーション、教育用の映像教材などもまた同様な論点から捉えることが可能であろう。アメリカ研究では坂下史子の「歴史展示とその社会的受容――リンチ写真展“Without Sanctuary”を例に」や矢口祐人「弁当からミックス・ランチへ――博物館とハワイ日系移民史の表象」、その他にも万国博覧会やエノラゲイ号展示問題などの研究もこうした視点を下支えする［坂下 2001; 矢口 2000］。図 2 は 2005 年に筆者がハワイの陸軍博物館（Hawaii Army Museum）で撮影した展示地図である。この地図の作成年は不明であったが、図内には「United States Possessions 1898-1899」の表記があり、太平洋地域の四つの海外領土（overseas possessions）が示されている。この図の展示ラベルには「Annexation a Goal」と見出しが書かれ、そのあとに記載されているわかりやすい説明にはハワイ併合論争に際して、一世紀も前に米連邦議会で行われた併合論者の説明がほぼそのまま掲載されている。展示の教育的価値やロビー上の評価が成される一方で、このように人種主義やイデオロギー、動員の仕掛けなどの問題点が内在されている場合もある。

学習マンガをはじめ、こうした分析の対象作品の図像史料（視聴覚史料）

図 2「Annexation a Goal」

にしばしばみられることであるが、作品を届ける対象者にとってわかりやすさや理解の容易さを重視するあまり、それぞれの目的のために史料が扱っている内容の事実関係や脈絡上の蓋然性が捨象されることもある。そうした課題を先行研究は指摘してきたのである。これらの研究に共通するのは、発信側の意図の析出や図の読み取りに加えて、図像の受け手の環境をその形態の分析と、形態毎に多数の図像作品を提示し、そこから実証的に把捉できる論点をそれぞれ提示している点である。論証の脈絡にあった「わかりやすい」図像の提示ではなく、多数の作品を並列的に分析し、傾向や共通事項、差異を分類し、当該メディアの性質と作品間の共通性を喝破する。

こうした図像が歴史を表現し、図像で歴史を示す二つの論点とは別に、図像から歴史を解析すること――（3）図像の史料利用もまた重視すべき視点である。（2）であげた佐藤、土屋、黒田らの論考も史料論を論じる上で重要な先行研究であろう。

西洋史の脈絡ではスイス中世史家森田安一の『ルターの首引き猫――木版画で読む宗教改革』（1993 年）及び『木版画を読む――占星術・「死の舞踏」そして宗教改革』（2013 年）や、奥田真結子「ピーテル＝ブリューゲル絵画に見る画家の農民思想とその社会」（2011 年）が、また英文学では英国

文化史を研究する清水一嘉がアカデミックなものではないとしつつも同時代の諸作品とそれを取り巻く社会情況を評した『挿絵画家の時代――ヴィクトリア朝の出版文化』（2001 年）で、それぞれ図像史料としての木版画、絵画、挿絵を取り上げる。これらは傍証として図像資料を扱うのではなく、正面切って図像を扱い、史料批判を加えながら、図像を丹念に読み解きかつそれらが読まれる社会空間を視野に入れて論を展開している。

アメリカ史及びアメリカ地域研究の脈絡に目を向けると、アメリカ本国では報道機能としての政治マンガ文化が一定の役割を果たしているがゆえに、政治マンガに関する研究も蓄積されている。研究手法についての先行研究もあり、歴史史料としての議論も早くに登場している。政治マンガを中核的に扱う研究は 1980 年代以降に登場しているが、それ以外の歴史研究では当代の認知や説明としての挿絵的提示に限定したものが多く、史料操作の手順を踏んだ図像提示をしている研究は多くはない[9]。本邦での研究としては、まず政治マンガの全体像を示すものとして、社会学及びメディア研究の領域において、政治学者茨木正治が『「政治漫画」の政治分析』（1997 年）及び『メディアのなかのマンガ――新聞一コママンガの世界』（2007 年）を著しており、これは政治マンガのみならず図像研究を行う上でのメソドロジーや、メディア学的な接近法の示唆に富む[10]。本邦のアメリカ研究では風刺画に描かれた中国人イメージからアメリカの国民意識と市民権の境界を問い直す貴堂嘉之の「＜アメリカ人＞の境界と中国人移民」（2012 年、『アメリカ合衆国と中国人移民――歴史のなかの「移民国家」アメリカ』所収）が図像史料の表象を用いた同時代認識の析出として着目される。貴堂の論考には先行して「南北戦争・再建期の記憶とアメリカ・ナショナリズム研究：『ハーパーズ・ウィークリー』とトマス・ナスト風刺画リスト」1 ～ 3（2000-2002 年）があり、ここでカートゥニスト（風刺画家）としてのナストを分析し、彼の作品のインデックス化を行い、時代的傾向や作風の変遷を確認している。こうした作業がその後の前掲論文をはじめとする各論考において提示された風刺画の史料性を担保しているのである。

こうした三分類を示したが、実のところ、これらは手法や分析において不可分な部分もあり、それぞれ重なり合っているし、他方でこれらの分類から

こぼれ落ちる図像作品の定義づけも可能であろう。この意味において、分類化する行為それ自体に意識を向けたいのではない。こうした歴史を表象しうる図像作品を検討する史家や地域研究者は、それぞれの視点――「図像が歴史」「図像で歴史」「図像から歴史」――から史料としての図像に接近すべきであるが、そうした際にはどの視点に基づいているのかを意識化する必要があろうし、そうした視点の意義づけをも求められよう。

3. 風刺画及び図像史料の史料批判／操作の意識化

前述の『絵解き研究』は絵解きに留まらず、絵説きを論ずる論考が多数掲載された学術雑誌であった。同誌の論文の多くは仏教画を扱うが、仏教説法に用いられる大判の仏教画の図像表象や記号、内在された物語を読み解くばかりでなく、そうした絵がどのような伝来や仏教説話を著すものかを解説し、また檀家の人びとの前で仏僧が説法をする――すなわち、絵説きをする過程をもが分析対象となった。作品単体の絵の理解に終始するのではなく、その仏教画にまつわるメディア的な空間や背景となる社会（文化的コード）をも分析するのである。これは中世ヨーロッパで宗教木版画が読み聞かされたり、美術館や教会、図像蒐集家の私邸などで絵画を見たり、雑誌に掲載された政治マンガを読んで笑ったりする状況とも通ずる視点である（現在、『絵解き研究』に参画していた研究者は発展的に紙芝居や演芸空間を取り込んだ研究を進めている）。図像研究において図像内の記号や表象を読み解く「絵解き」の作業が大切であるのは言うまでもないが、このように仏教画にしろ、絵図にしろ、木版画にしろ、風刺画にしろ、図像がまなざされるメディア空間を確かめ、図像が働きかける対象――受け手としてのオーディエンス――へのインパクトを精査することで、より史料的信頼性を確保しうるのである。

ここで、ヨーロッパの文化史家ピーター・バークの議論を参照したい。バークは『時代の目撃者』（原著 2001 年）でテクストと視覚イメージの関係を論じながら、「図像学的方法はあまりにもひらめきや推論に頼っているので、信頼できない部分があると批判もされてきた」経緯を読者、すなわち図像を

学術研究の対象にする研究者に突きつける。

> 図像学的プログラムは残存する資料に記録されていることもあるが、たいていは作品自体から推測するしかない。その場合、異なった断片をジグソーパズルまがいにまとめることになる。その手腕には目を見張るものがあるにせよ、かなり主観に左右されることはたしかだ。（……）図像学にくらべて図像解釈学はいっそう推論的であり、解釈者たちには視覚イメージの中にすでに彼らが知っているもの、すなわち時代精神（ツアイトガイスト）を発見するだけで終わってしまうという危険がついてまわる。
>
> 図像学的研究はまた社会的視野を欠く、つまり社会的文脈に無関心だという理由で批難されることがある。パノフスキー（筆者注：ドイツ美術史家のアーウィン・パノフスキー）は社会学的美術史に敵意を抱いていたのではなかったにせよ、無関心だったとして悪名をはせてしまったが、彼にとっては視覚イメージの持つ「固有の」意味を発見することが目的だったのであり、それが誰にとっての意味なのかという問題には触れなかった。［バーク 2007: 52］

さらにバークは、図像学上の問題として言語中心の図像分析法に意識が偏り、描写形態よりも内容を重視しすぎるきらいがあり、「それを用いる研究者が視覚イメージの多様性に十分な注意を払っていない」ことを注意喚起する。視覚イメージを解釈する方法がある意味ではあまりに厳格かつ狭量で、別の意味ではあまりにも漠然としている欠点があり、こうした手法を有効だと認めると、「視覚イメージ本来の多様な性格だけでなく、視覚イメージが良きヒントを与えてくれる歴史の問題の多様な側面が過小評価」されかねず、それを乗り越える営為が求められるとする［バーク 2007: 51-55］。中国現代史家で上海都市史を研究する髙綱博文も、美術史家アイヴァン・ギャスケルの史料論を引用しながら、図像史料のインパクトに比してその解釈が多様で恣意的になりやすく、その伝でいえば「文字史料と同様に厳密で公正な史料批判」を行うべきであると指摘する［髙綱 2014: 75; ギャスケル 1996］。こうした議論を踏まえるならば、その史料批判は図像作品の内外両面で展開されるべきで、その一方だけでは図像は比較の第三項を失った私的な領域の物語となってしまう。

ただし、こうした先行研究においても十分に認識されていることだが、筆者は歴史学における図像研究の接近法に全ての研究者が通じねばならず、そ

うした手法を論ずる正しい道筋があるとか、一つに統合しようと提言したいわけではないし、それは不可能である。中世の木版画研究と、近世の西洋美術の史的研究と、近代の仏教画の絵説きと、現代の風刺画研究（誤解のないように申し添えるが、この例示には意図はない）では、作家分析や定点観測やトレンドの分析などで、何かしらの画一的な方法で論証が可能であるとか、そうすべきであると言いたいわけでもない。実際のところ、社会学、メディア研究、マンガ研究においても、対象となるテーマによりアプローチは異なるし、メディア理論の多くは議題設定効果論といった大きな枠組みはあっても、研究者それぞれが図像を含む各種メディア資料を分析する手法の実証性やその検証法を提示しているのが常である。そう考えていけば、単純にメディア研究などの知見を借りて、その手法をそのまま当てはめれば史料的な担保が可能であるとはわれわれは思い至るべきではない。メディア研究の長期にわたる理論構築を参照しながら、丁寧な実証の手順を知り、そうした中で妥当な手法を選択し、学び、歴史学としての実証的な追試をしながら、それぞれの研究上で図像の史料操作として妥当なものと担保しうる手法を意識化し、研究に反映させるべきである。

そうした分析の位相をどう捉えるかは、歴史研究の脈絡の複雑さ、多層性ゆえに難題である。これはある種のレトリック的避難ではなく、歴史図像解釈を展開するためには、各領域や各時代、各分析視座の脈絡を無視せず、文章統計史料批判と同様に寄り添うべきであるという積極的かつ能動的な理由のゆえである。また、歴史学者が個々に構築してきた図像解釈を下支えする手法を誰もが共有し、実践できるわけではない。社会史家が行うような多数の図像史料をインデックス化したり定期観測や定点観測でトレンド分析を行ったりする析出法や、西洋美術史家の篠塚二三男が厚く論証する平面図の空間構成分析が誰にでも可能なわけでもないし、それらすべてを総括的に取り扱えるわけでもない[11]。しかしながら、図像研究者は史料批判の手順と操作の前提となるフレームワークを意識化することで、史料的信頼性を担保しうる図像解釈を展開する基盤を備えられるようになるはずである。

こうした目的のため、筆者は基礎的な史料論的扱いの試論をすでに論じたが、ここでその一部を再掲しつつ確かめたい［金澤 2009］。図像史料の史料

批判に際しては、作品の内在的分析と外在的分析が一つの柱となる。内在的分析は図像内の記号や表象の読み解きを中核的に行うが、こうしたことで、図像内フィギュアの力関係の析出［Stewart 2001］や、複数の作者の諸作品を並列的に分析した場合、記号の類型化による同時代の共通認知の析出が可能になる。また、図像を見る読者の視点移動の確認（作品内の統辞性質）や図像内のストーリー展開を分析することで、図像演出ないし解釈の同定を行うことができる。ただし、ここで読み取った記号や表象がはたして作家性に由来するのか、当時の共有認識に基づいているのか、またその両方なのかは留意が必要である。また、こうしたコードの読み解きが同時代の読み手によって行われるにしろ、研究者によってにしろ、実作者あるいはその提示者・編集者の意識と同等のものが読み取り可能であり、送り手と受け手の両端が必然的に左右対称をなすと考えるべきではない［ギャスケル 1996: 219］。その一方で批評言説の常であるが、現代の認識に照らし合わせた結果、実作者や同時代人読者の意識や考え、価値観にはなかった視点を析出することも十分にあり得ることも忘れてはならない。

こうした内在的分析に対して、外在的分析は図像作品の読まれる「場」についての分析である。たとえば、20 世紀転換期のアメリカの政治マンガについて考えれば、諸作品の掲載メディア（全国誌か地域紙か、地域はいずれか）やその発行数、読者層、輸送・定期購読料金といったメディア空間を十全に認識することで図像の史料操作の精度を増すことができる。論証は困難であるが、読者による読み説き環境（たとえば雑誌のバックナンバーの参照や、表紙及び二つ折りの大判リトグラフ付録といった目のつきやすさ）なども視野に入る。

これらのメディア分析視点に加えて、作家性を明敏に提示するとしても、サルバドール・ダリやシュルレアリスムのように社会的連続性を絶つあるいは超越するにしても、図像の実作者がとる創作の姿勢を明確にし、またその作風の読者あるいは社会との距離感をはかる上での、制作者のライフヒストーリーの検討は大きな課題である。政治マンガ・風刺画の場合、カートゥニスト研究がそれにあたるが、たとえば 19 世紀後半の時代を画する風刺画家であったトマス・ナストに焦点をあてた研究のように、作家の作品群の全

体像を示したり、その活動の経緯を把握したりすることで作品の外在的脈絡を厚く捉えることができ、これはさらに内在的分析へと論を進める手立ての一つとなる[12]。カートゥニスト自身の手によって編纂された作品集［たとえばAttwood 1900］などにみる作品の選択やキュレーションもまた、作家の図像の表象意図を含む、含まざるにかかわらず、作品の表象や視点の傾向を示しうる。ただし、無名の作家や著名な作家でも記録の欠落により、こうしたライフヒストーリーを掴むのは容易ではなく、どの作家に対しても十全な追跡調査が可能だとは言えず、困難な課題である。

こうした内在分析・外在分析を念頭に置くとしても、もう一つ忘れてならないのは、それぞれの図像の形態が元来有しているメディア機能の確認である。政治マンガ、写真、ポスター、ビラ、仏教画、絵画、絵地図とあげても、それぞれのメディア的な性質や働きは異なっており、それぞれの形態毎に定義づけなければならない。たとえば、政治マンガは報道メディアとして大衆に政治意識を流布し、賛同あるいは批判を促すメディア機能を持つ媒体である[13]。政治に対する関心・認識・判断を培う手立ての一つとして読者が政治を認知する「疑似環境」化が政治マンガの重要な性質である。政治マンガを読むことでニュース言説の「平準化」と「先鋭化」が行われ、同時に読者が作品に内在する情報、風刺、ユーモアを解釈し、トピックスの理解が進むのである。こうしてマンガのトピックと受け手の認知の共有化が行われる。加えて、政治マンガはシンボル機能を有し、政治的な構造を読者に伝えるが、対象トピックの簡潔化と洗練化を行う「凝集作用」と、トピックの当事者に対する共感を持たせ、読み手に当事者意識を持たせる「喚起作用」を持つ。こうしたメディア構造から、読み手が政治トピックを認識する状態（「環境」）から、政治問題を主体的に理解し、具体的な問題関心を持つ「状況」化が行われるのである［茨木 1997: 6-82, 190-207; 金澤 2009: 127］。このように図像の参照軸としてメディア機能を規定することは、その後の論証手法の形成の柱となる。

繰り返しになるが、こうした内在的、外在的といった言葉を用いてはいるものの、そうしたフレームワークを定義づけた上で、史料性を担保する個別の実証的手法や解釈・論証法を構築すべきであると本論は示したいのであ

る。副題と冒頭に挙げた「共有知」とは、個々の研究者がその学術的営為を可視化させ、同時に相互参照しあいながら、適宜自己研究への最適化と適応を進められる環境の構築を指す。ここでの問題はあまりにも繰り返されてきた議論であるが、西洋、日本、アジアといった地域にしろ、中世、近世、近代、現代あるいはもっと詳細な時代設定にしろ、各領域のディシプリンにしろ、対象とする図像の種類にしろ、相互の研究者の交流があまりにも少ない現状がある。他方で不用意に他研究領域の知見を拝借してしまうのではないか、そのディシプリンを不理解のまま自己の歴史・地域研究へと接合してしまうのではないかとの危惧もある。つまり、不動であり、怠惰であった。その意味において、「共有地」もいまだない。学術の共有地は楽園ではない。われわれは研究のためのホームステッド法をつくり、荒れ地を開拓し、北西部条例をおしすすめなければならない。それは時には帝国主義の青写真を産み出し、パナマ運河地帯を租借し運河を建設してしまうやも知れない。しかし、研究上の西部開拓を促進しなければ、研究の裾野は拓かれない。ただし、突然のフィリピン領有やチェロキー族の涙はみたくはないとの強い意志も必要である。

4. おわりに

政治マンガを中心に本邦での図像史料研究の学説史的脈絡を追った。歴史学及び地域研究においてこうした歴史表象の扱いの位置づけを試論として提示したが、本稿での筆者の意図は、図像史料の学術研究を志すものは図像作品の内外での分析を意識化すると同時に、自説に都合の良い一つの図像を恣意的に利用しないよう注意喚起をすることにある。本論の中で図像史料の傍証といった言葉を使ったが、これには図像史料を中核史料として扱うべきで傍証として使うべきではないとの含意はない。文書統計をはじめとして、他の視聴覚史料を含めた各種史料とともに図像史料を用いることは、その学術研究の論証に十分に寄与しうる。しかし、繰り返し申し添えるが、そうした他の史料を扱うのと同等に図像を扱う際の史料批判及びその操作の意識化が求められる。同時にそうした学術研究者の姿勢とともに、学術研究の公表の

「場」の問題もわれわれの資産として考えられなければならない。論文執筆や口頭報告の際の紙面的制約やプレゼンテーションの技術的かつ空間的、時間的問題など課題は多い。本論では十分な議論ができなかったが、図像史料の著作権と所有権の問題も注視しなければならない問題である。

最後に筆者の研究視点を申し添えたい。アメリカの帝国主義的進展のレトリック研究を進め、対外関係史というよりはメイア論争以前の外交史に近い史料検討を行っている立場ゆえ、社会史や国際関係論からの外交史批判をどのように乗り越えるかが課題であった[14]。こうしたなか、20 世紀転換期の外交政策決定過程を下支えした一般的なアメリカ人の外交意識――同時代人の見た外交に対する心象風景と共有認識――はいかなるものだったのかに関心が向いた。その析出と論証を試みるためにはじめたのが、オピニオン誌に掲載された政治マンガの研究であった。これは同時に、同時代人の集合的「記憶」を探る研究でもあった。2006 年の開始当初は、不器用にも図像に内在するテクストを読み取る作業としてのみ図像に接していた。その後、こうした分析は重要であるが、他方で視覚的脈絡をそぎ落とすことになるかもしれないとの問題点に思い至った。図像内に配置されたフィギュアの位置、大きさ、年齢、性別、服装、顔の向きなどこうした記号の統辞性や視覚パラダイムが、そして天使やミス・コロンビアにアンクル・サムなどキャラクターをはじめとして風景や道具などに示される社会的価値観が、同時代の他者へのまなざしを反映しているとの立場から理解するようになった。政治マンガは笑い、風刺する機能から、ダリやシュルレアリスムの作品のような社会的脈絡の意識的な排除を行わず、むしろそれを積極的に求めるメディアであった。ゆえに、笑うことによって同時代の価値観を探り、そして笑うことで同時代の主流派の価値観に身をゆだねてしまったことを反省しながら、政治マンガの史料批判を重ねてきた。図像に対して主観的にも客観的にも接近しながら、敢えて言うなら図像史料の熱さと冷たさを感じながら、そして研究者としての熱意と冷静さを抱きながら触れていく。政治マンガ研究は図像研究の一端であるが、こうした思惑で歴史研究における図像史料の活用の「共有地」と「共有知」について考え、実現させて行きたい。

※ 本稿が依拠した研究は JSPS 科研費（26870631）及び（23650123）の助成を受けたものです。

註

1. バージャー［1972］、ソンタグ［1977］、バルト［1980］。こうした動きの背景には、写真を撮る私的行為がより社会的に普及したことがある。ヴェトナム戦争などを通して写真メディアに対する印象が強化された時期でもあるが、入れ替わるように報道としての写真メディアが衰退し、テレビと役割を交代する形で報道誌が廃刊に追い込まれたのもこの時期であった。こうした図像論の批判には様々あるが、バルトの一連の著作に対する批判については、たとえば記号学者でメディア研究者の小池隆太の論考、小池［2008］やトリフォナス［2008］などを参照のこと。

2. なお、本論で用いる「共有」の発想については、『世界メディア芸術コンベンション 2012』「オープニングセッション 想像力を共有するとは？」（総合座長：吉岡洋）の議論に触発されている。視聴覚史料の受け手（読者、the Receiving Ends）を巡っての「共有知」および「共有地」の議論は別稿に改めたい。

3. 視聴覚史料の可能性を巡って多くの対象が俎上に上がってきているが、本稿では政治マンガをはじめとする図像一般（イラスト、政治マンガ、地図、カートグラフィーなど）に限定する。しかし、近年、映像や音声に加えて、音楽やダンス、もしくはその表現／視聴空間を歴史学や文化人類学的に論じる論考も表れており、それぞれの研究において史料批判が提示されつつある。枚挙にいとまがないため、ここではこれらの先行研究を割愛する。

4. 科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究（研究課題番号：23650123）、研究代表者：家島明彦（島根大学）「マンガに関する人文・社会科学研究の国際的・学際的オンライン研究共同体の構築」。10名の多分野の研究者が参画したが、経済学、商学、法学分野の悉皆調査は今後の課題である。；テーマセッション（司会茨木正治、報告者家島明彦、池上賢、秦美香子、西原麻里）「マンガ研究と社会学研究の接点（1）」第85回日本社会学会大会（2012年11月3日）、於札幌学院大学；池上［2013］。

5. 金澤［2009, 2010］

6. ただし、こうした問題の背景には著作権の問題もある。研究機関リポジトリなどでの論文のインターネット上での公開も進んでいるが、特に現代史研究などで著作権処理が出来ず、掲載許諾が認められないケースもある。こうした場合の対応はわかれており、本文全体を未公開とする場合と、画像だけを削除処理をして公開する場合がある。

7. マンガ研究におけるオーディエンス分析については、たとえば社会学者池上賢の一連の論考など。池上［2009］。

8. Wisniewski［1979: 33］

9. アメリカでのメソドロジーを含む研究としてはCoupe［1969］、Press［1981］、Fischer［1996］、Katz［2004］、Lordan［2005］などがある。歴史学的な実証研究としては、たとえばMorgan［1988］、Soper［2005］。図像研究ではないが、アメリカ対外関係史の脈絡で政治マンガなどの図像を掲載している研究としては、たとえばRichard［1990］、Schoonover［2003］、Kramer

［2006］。

10. 茨木の方法論の歴史学への応用については、拙稿、金澤［2009, 2010］を参照のこと。

11. 篠塚［1991, 2007, 2014］など。他の平面空間分析の事例として、たとえば久保［2012］を参照。

12. たとえば、Paine［1904］、貴堂［2000-2002］、袖井［2007］。

13. 政治マンガのメディア機能に言及のある論考として、Press［1981］、茨木［1997, 2007］など。

14. メイア論争やアメリカ外交史の名称の問題については、林［1996］を参照のこと。

参照文献

秋元孝文「紙の上のエメラルド・シティ―― *The Wonderful Wizard of Oz* と紙幣制度」『アメリカ研究』第 45 号，2011 年，97-116 頁 .

Attwood, Francis Gilbert. *Attwood's Pictures: An Artist's History of the Last Ten Years of the Nineteenth Century*. New York: Life Publishers Co., 1900.

バルト，ロラン『明るい部屋――写真についての覚書』花輪光訳，みすず書房，1985 年：原著 1980 年 .

バージャー，ジョン『イメージ Ways of Seeing ――視覚とメディア』伊藤俊治訳，PARCO 出版，1986 年：原著 1972 年 .

バーク，ピーター『時代の目撃者――資料としての視覚イメージを利用した歴史研究』諸川春樹訳，中央公論美術出版，2007 年：原著 2001 年 .

Coupe, W. A. "Observations on a Theory of Political Caricature," *Comparative Studies in Society and History* 11 (1969): pp. 79-95.

Fischer, Roger A. *Them Damned Pictures: Explorations in American Political Cartoon Art*. North Haven: Archon, 1996.

藤井慈子「ローマ・ガラスと都市景観：都市バイアエの図像解釈を中心に」『西洋史學』第 202 号，2001 年，23-42 頁 .

福間良明，吉村和真，山口誠『複数の「ヒロシマ」――記憶の戦後史とメディアの力学』青弓社，2012 年 .

ギャスケル，アイヴァン「イメージの歴史」谷川稔他訳，ピーター・バーク編『ニュー・ヒストリーの現在――歴史叙述の新しい展望』所収，人文書院，1996 年：原著 1991 年，199-228 頁.

Guenter, Scot M. *The American Flag, 1777-1924: Cultural Shifts from Creation to Codification*. Rutherford: Fairleigh Dickinson University Press, 1990.

林義勝「アメリカ外交史学界の最近の動向」『駿台史学』97 号（1996 年 3 月），88-100 頁 .

茨木正治『「政治漫画」の政治分析』芦書房，1997 年 .

――『メディアのなかのマンガ――新聞一コママンガの世界』臨川書店，2007 年 .

池上賢「『週刊少年ジャンプ』という時代経験：解釈枠組みとしてのマスター・ナラティブ」『マス・コミュニケーション研究』75，2009 年，149-167 頁 .

――「社会学におけるマンガ研究の体系化に向けて――データベースによる先行研究の整理・検討から――」『応用社会学研究』55，2013 年，155-173 頁 .

石子順『カリカチュアの近代―― 7 人のヨーロッパ風刺画家』柏書房，1993 年 .

金澤宏明「史料としての合衆国の政治カートゥーン――アメリカ対外関係史研究と図像分析――」『アメリカ史研究』32 号，2009 年，126-35 頁 .

――「中米地峡運河建設問題と政治カートゥーン表象」『明治大学人文科学研究所紀要』第 67 冊，2010 年，59-85 頁 .

Katz, Harry. "An Historic Look at Political Cartoons. 'The future of editorial cartooning in America is uncertain, but the past holds lessons for us all.'" *Nieman Reports* 58-4 (Winter 2004): pp. 44-46.

貴堂嘉之「南北戦争・再建期の記憶とアメリカ・ナショナリズム研究：『ハーパーズ・ウィークリー』とトマス・ナスト風刺画リスト」1 ～ 3 『千葉大学人文研究 人文学部紀要』29，30，31 号，2000-2002 年 .

――「＜アメリカ人＞の境界と中国人移民」『アメリカ合衆国と中国人移民――歴史のなかの「移民国家」アメリカ』名古屋大学出版会，2012 年 .

Kiyama, Henry (Yoshitaka), Frederik L. Schodt. *The Four Immigrants Manga: A Japanese Experience in San Francisco, 1904-1924*. Berkeley: Stone Bridge Press, 1999.

木暮修三『アメリカ雑誌に映る＜日本人＞――オリエンタリズムへのメディア論的接近』青弓社，2008 年 .

小池隆太「ロラン・バルト『明るい部屋』における「写真論」の意味」『山形県立米沢女子短期大学紀要』第 44 号，2008 年，47-57 頁 .

Kramer, Paul A. *The Blood of Government: Race, Empire, the United States, & the Philippines*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006.

久保友香「浮世絵の非写実的表現に関する 3 次元幾何学的分析」『太田記念美術館紀要 浮世絵研究』第 2 号，2012 年，51-81 頁 .

黒田日出男，杉本史子，メアリ・エリザベス・ベリ『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会，2001 年 .

Lordan, Edward J. *Politics, Ink: How America's Cartoonists Skewer Politicians, from King George III to George Dubya*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2005.

Morgan, Winifred. *An American Icon: Brother Jonathan and American Identity*. Newark: University of Delaware Press, 1988.

森田安一『ルターの首引き猫――木版画で読む宗教改革』山川出版社，1993 年 .

――『木版画を読む――占星術・「死の舞踏」そして宗教改革』山川出版社，2013 年 .

奥田真結子「ピーテル = ブリューゲル絵画に見る画家の農民思想とその社会」『専修史学』50，2011 年，1-33 頁 .

Paine, Albert B. *Th. Nast, His Period and His Pictures*. Facsimile: Pyne Press Princeton, 1904.

Press, Charles. *The Political Cartoon*. Rutherford: Fairleigh Dickinson University Press, 1981.

Richard, Alfred Charles, Jr. *Panama Canal in American National Consciousness, 1870-1990*. New York: Garland, 1990.

坂下史子「歴史展示とその社会的受容――リンチ写真展“Without Sanctuary”を例に」『アメリカ史研究』第 24 号，2001 年，69-83 頁 .

佐藤卓己『大衆宣伝の神話――マルクスからヒトラーへのメディア史』弘文堂，1992 年 .

Schoonover, Thomas. *Uncle Sam's War of 1898 and the Origins of Globalization*. Lexington: University Press of Kentucky, 2003.

清水一嘉『挿絵画家の時代――ヴィクトリア朝の出版文化』大修館書店，2001 年.

篠塚二三男「レオナルド・ダ・ヴィンチの素描『マギの礼拝背景図』の空間構成――その遠近法と数理的秩序の解明」別府大学文学部美学美術史学科『芸術学論叢』第 10 号，1991 年，1-57 頁 .

――「ピエロ・デッラ・フランチェスカの『むち打ち』の空間構成」『跡見学園女子大学文学部紀要』第 40 号，2007 年，A43-A82 頁 .

――「ルート 5 矩形とルネサンス絵画」『跡見学園女子大学文学部紀要』第 49 号，2014 年，A47-A70 頁 .

袖井林二郎『アーサー・シイク 義憤のユダヤ絵師』社会評論社，2007 年.

ソンタグ，スーザン『写真論』近藤耕人訳，晶文社，1979 年：原著 1977 年 .

Soper, Kerry. “From Swarthy Ape to Sympathetic Everyman and Subversive Trickster: The Development of Irish Caricature in American Comic Strips between 1890 and 1920,” *Journal of American Studies* 39 (2005): pp. 257-96.

Stewart, Ronald Geoffrey.『「パック」的秩序 1905-1914 漫画雑誌ブームにおける国家／民族／人種』（修士論文，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，2001 年）

平正人「フランス革命新聞史研究の可能性」『西洋史學』205 号，2002 年，63-77 頁 .

髙綱博文「歴史学における図像史料の可能性：中国近現代史研究からのコメント」（特集 歴史学における図像史料の可能性：版画・広告・ポスター）『史潮』新 75 号，2014 年，73-78 頁 .

トリフォナス，ピーター P.『バルトと記号の帝国』志渡岡理恵訳，岩波書店，2008 年 .

土屋礼子『対日宣伝ビラが語る太平洋戦争』吉川弘文館，2011 年 .

Wisniewski, Richard A. *The Rise and Fall of the Hawaiian Kingdom*. Honolulu: Pacific Basin Enterprises, 1979.

矢口祐人「弁当からミックス・ランチへ――博物館とハワイ日系移民史の表象」『地域研究論集』3-1，2000 年，59-73 頁 .

安田常雄「大衆文化のなかのアメリカ像――『ブロンディ』から TV 映画への覚書」『アメリカ研究』第 37 号，2003 年，1-21 頁 .

吉村和真，表智之，田中聡『差別と向き合うマンガたち』臨川書店，2007 年 .

※ マンガ作品及び口頭報告は割愛する。本文のストーリー・マンガの初出に関しては本として刊行された時点ではなく、雑誌連載の場合は連載開始時期を明記した。